

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Distribution of Russian : libo and nibud' series indefinites

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Evseeva, Elena メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/755

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ロシア語の *-libo*, *-nibud'* 不定代名詞の分布

Evseeva Elena

第1章 導入

本稿では、ロシア語不定表現 (indefinites) の中でも、いくつかのコンテキストにおいて機能の“オーバーラップ”を見せる *libo*-系列, *nibud'*-系列を取り上げ、それらの分布について考察を行う。

本稿が扱う不定表現は、今までも多くの先行研究において様々な枠組みの中で分析の対象となってきた。ロシア語の不定表現を扱った先行研究は大きく、言語類型論的研究, 統語論的研究, 意味論的研究に分けることができる。

まず、類型論的なアプローチの中で、不定表現を機能の面から体系的に分析しようとしている有名な研究としては Haspelmath (1997) がある。

Haspelmath (1997) は、不定表現の用法を言語普遍的に整理するための意味論的含意マップ (implicational map) 上で、諸言語の各不定表現がどの範囲に広がって用いられるか、その分布状況を整理した研究である。ここでロシア語の indefinites の分布を整理した図を Haspelmath (1997:71) から引用しておく、次の通りである。

1 本稿では indefinites の訳として「不定表現」という術語を用いる。なお、この用語はおおよそロシア語学で伝統的に用いられている「不定代名詞 (неопределённые местоимения (neopredel'ennyye mestoimenija))」に対応している。また、*kto-libo*, *kto-nibud'* (*who-libo*; *who-nibud'* 誰か) のように、wh 要素に *libo* や *nibud'* という要素を後接させることにより形成される語を、本稿ではそれぞれ *libo*-words と *nibud'*-words と呼ぶ。

なお、先行研究間で系列の具体的呼び方は異なっている。Haspelmath (1997), Progovac (1994) では series (*nibud'*-series), Brown (1999) では words (*nibud'*-words), Abels (2005) では phrases (*nibud'*-phrases) となっている。

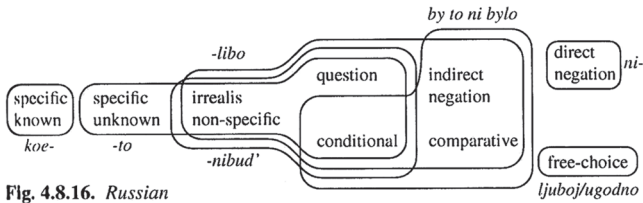


Fig. 4.8.16. Russian

図1 Haspelmath (1997:71) によるロシア語不定表現の意味論的含意マップ

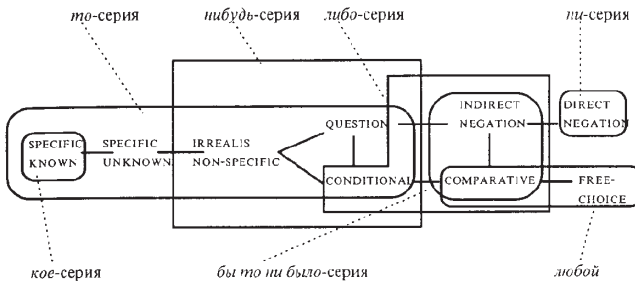


図2 Tatevosov (2002:141) によるロシア語不定表現の意味論的含意マップ

一方、同じく類型論的アプローチの枠組みで分析を行っている Tatevosov (2002) は基本的にロシア語の不定表現を中心に考察を進めている。Tatevosov (2002) の中心的な関心は比較基準 (comparative) を表す不定表現にあるが、その他のコンテキストにも触れられている。

一方、当該の要素への言及が見られる生成統語論的な枠組みで書かれた研究のうち、GB 期の代表的なものとしては、束縛理論の枠組みの中で不定代名詞を分析しようとした Progovac (1994) がある。

一方、ロシア語の不定表現 (主に *ni*-words) が考察の中心対象になっている研究には Brown (1999) や Abels (2005) がある。

なお、統語論的アプローチにおける *nibud'*-words の分析には Brown and Franks (1995) や Brown (1999) がある。Brown and Franks (1995) は、

諸言語の PSIs (Polarity Sensitive Items; 極性感応表現) を一般化束縛原理により分析する Progovac (1994) を受け、ロシア語 *nibud'*-words を束縛原理の枠組みで分析を行っている。Brown (1999) はそのような Brown and Franks (1995) の分析を、チョムスキー統語論・極小主義の枠組みで定式化した研究である。

一方、意味論的な枠組みの中では、本稿が扱う不定表現は PSIs の一種として分類されることが多い。具体的には、monotonicity-based approach (MBA) と veridicality-based approach (VBA) が問題になることが多い。そのような二つの流れを受け、これらの不定表現を PSIs の一種である weak NPIs⁴ として分析しようとしている研究としては、Pereltsvaig (2000) がある。

なお、近年の意味論的アプローチの中には興味深い研究としては Yanovich (2005), Pereltsvaig (2008) がある。

しかし、いずれの不定代名詞についてもそれぞれの理論的な枠組みにきれいに収まらない場合があり、先行研究の間でしばしば、生起環境に関し相容れない記述が見られるため、本稿ではそれぞれの不定代名詞が生じる環境について、先行研究における観察の誤りを正し不十分な点を補いながら記述することに主な目的がある。

次章ではまず同節否定環境を除いた環境での分布について記述する。

2 単調性にもとづくアプローチである (Ladusaw (1980) 等)。そこでは単調減少性 (研究者により、単調減少性と同一性質を指すのに、下方含意 (Downward Entailment) という術語を用いる場合がある) が広範囲の否定極性項目 (Negative Polarity Item, NPI) の認可条件を規定する上で重要な役割を担う。

3 真実性にもとづくアプローチ (Zwarts (1995), Giannakidou (1998) 等) である。そこでは非真実性が広い範囲の肯定極性項目 (Positive Polarity Item, PSI) の認可条件を規定する上で重要な役割を担う。

4 否定極性項目や肯定極性項目の強さに関する意味論的観点からの分類については、Zwarts (1995) や van der Wouden (1997) が有名である。van der Wouden (1997:36) は、ブール代数的特徴により、monotone decreasing (すなわち downward entailing), antimultiplicative, anti-additive, antimorphic という四つの性質を定義している。また van der Wouden (1997:36) では NPI をその強さにより、weak, medium, strong の3種に区分する際にはそれぞれ、monotone decreasing, anti-additive, antimorphic 環境で生起する要素とされる。

第2章 非否定的環境での分布

nibud'-words, *libo*-words とともに、典型的な現実態文、とりわけ、過去または現在進行の肯定平叙文（つまり、concrete events（用語は Moltmann 1997による））において認可されず（cf.: (1)）⁵,

(1) *On kupil *chto-nibud'* / *chto-libo* na rynke.

he bought what-*nibud'* what-*libo* on market

彼は市場で何かを買った。

一方、典型的に用いられるコンテキストは以下の通りである。（*nibud'*-words, *libo*-words とともに用いられるが、*libo*-words はスタイル的に強く文章語に傾く場合がある。）

2.1. 非現実態 (irrealis nonspecific) コンテキスト

非現実態コンテキストとしては例えば、以下の ⟨i⟩ ~ ⟨iv⟩ のようなものがある。

⟨i⟩ 主文の事象時より後に補文の事象時が位置するという関係にある補文 (*hotet'* 'want', *sobirat'sja* 'intend', *obeshat'* 'promise' などの主語制御動詞が取る不定詞節, *prosit'* 'ask', *ugovarivat'* 'persuade' などの目的語制御動詞が取る不定詞節), それらの動詞がとる *chto*by 節 (3) や、以下の (4) や (5) のように、目的を表す *chto*by 節 (4)。

5 こうしたコンテキストでは指示物の存在や specificity がおのずと前提になっているため、ロシア語ではこの場合は specific な indefinites (*to*-words) が使われる。

(1)' On kupil *chto-to* na rynke.

he bought what-*to* on market

彼は市場で何かを買った。

(2) Ja poprosil ego kupit' *chto-nibud'* / *chto-libo* na rynke.

I asked him to_buy what-*nibud'* what-*libo* on market

私は市場で何かを買うように彼に頼んだ。

(3) Ja hochu, chtoby on priglasil *kogo-nibud'* / *kogo-libo* na vecher.

I want COMP he invite_SBJ whom-*nibud'* whom-*libo* on the_party

私は彼がパーティに誰かを誘うよう望んでいる。

(4) Ja dal synu deneg, chtoby on kupil sebe *chto-nibud'* / *chto-libo* na

I gave_to_son money COMP he bought_SBJ to_himself what-*nibud'* what-*libo* on

obed.

lunch

私は息子に昼ごはんに何かを買うようにとお金を渡した。

〈ii〉命令形 (*nibud'*-words が一般的である)

(5) Sprosi ob etom u *kogo-nibud'* / *kogo-libo* iz prepodavatelei.

ask about this at whom-*nibud'* whom-*libo* from teachers

これについては先生の誰かに聞いてください。

〈iii〉モダリティ構文

mozžno, mozhet 'can' や *dolzhen, nado, neobhodimo* 'must' などを含むような構文は *nibud'*-words, *libo*-words を認可する環境となる。これらの要素は deontic modality とともに epistemic modality も表すことができる (例えば、以下の (6) は二通りの解釈がある)。また、epistemic modality を表す副詞を含む文も *irrealis* として見なされ、*nibud'*-words, *libo*-words が認可される (cf.: (7))。

(6) *Kto-nibud' / kto-libo dolzhen emu ob étom skazat'.*

who-*nibud'* who-*libo* must to_him about it say

誰かが彼にこれを言うべきである（言わなければならない）。

誰かが彼にこれを言うに違いない。

(7) *Skoree vsego, on tam chto-nibud' / chto-libo kupil.*

faster of_all he there what-*nibud'* what-*libo* bought

おそらく、彼はそこで何かを買ったでしょう。

〈iv〉未来を表す文において(*nibud'*-words が一般的である)

未来を表す節は話し手の確信を表している点では一種のモダリティ要素を含むと考えることもできる。

(8) *On chto-nibud' / chto-libo pridumaet.*

he what-*nibud'* what-*libo* will_think_up (invent)

彼は何かを考えつくだろう。

2.2. 分配的 (distributive) コンテキスト

分配的コンテキストは大きく〈i〉と〈ii〉の2タイプに分けられる。

〈i〉 多回的・習慣的イベントを表す述語

このコンテキストでは、過去または現在の肯定平叙文であっても *nibud'*-words が認可される（例えば、進行中の動作を表している非文法的な (9b) と定期的に繰り返されている文脈の文法的な (9a) を比較）。

6 推量モダリティの意味を表わす挿入副詞的要素であっても *po-moemu* 'in my opinion' 「私の考えでは」のような表現を用いた場合には、「誰か」が nonspecific であるという解釈をしにくくなり、*nibud'*-words や *libo*-words ではなく、*to*-words が用いられる。

(9) a. On postojanno *čto-nibud'* / *čto-libo* smotrit po televizoru.

he constantly what-*nibud'* what-*libo* watch on television

彼はいつも何かをテレビで見ている。

b. *On sejchas *čto-nibud'* / *čto-libo* smotrit po televizoru.

he right_now what-*nibud'* what-*libo* watch on television

彼は今何かをテレビで見ている。

〈ii〉分配キーにあたる量化表現との共起

ロシア語では、当該の要素は、いわゆる *relative clause headed by universal quantifier* のみならず (10)、分配キーにあたる量化表現のスコープ内であれば、当該の要素が出現できるのである (11)。この点は、英語などとは異なるのである (cf. (12))⁷。

(10) *Každyj, kto čital kakoi-nibud' / kakoi-libo žurnal, uže znaet èto.*⁸

everybody who readPST which-*nibud'* which-*libo* journal already knows that

“Everybody who read any journal already knows that.”

(Pereltsvaig 2004: (10f))

7 (10) と (11) では分配キーにあたる量化表現は \forall universal quantifier の *kazhdyj* ‘everybody’ である。

なお、こうしたコンテキストに関しては、Pereltsvaig (2008) は、Farkas (1997) による variables の 3 種への下位区分 (individuals か situations か worlds か) および variables 間の依存関係への着目というアイデアに従った上で、*nibud'*-words を domain variable と共変動 (co-vary) する dependent variable として捉える分析を提示している。これにより、(11) では *kazhdogo* を domain variable とする分配的読み、つまりこの例なら質問相手ごとに異なることをたずねる読み ($\forall > \exists$) しか適格にならないことが説明されるとしている。

一方、Haspelmath (1997) では、ここで挙げたような例は、不定代名詞によって表されている対象の存在が前提となっていることがあるが、不定代名詞によって表されている対象が分配キーにあたる量化表現が指している対象の間に分配されているので、unique ではない、したがって、nonspecific であると見なされる。

8 以降、引用の場合は特別に言及しない限り、引用元の転写法を用いる。ただし、グロスでは本稿が考察の対象とする不定表現のグロスは本稿の記述法に統一させている。なお、(10)、(11) の例は各々 Pereltsvaig (2004, 2008) の例に *nibud'*、*libo*-words を加えたものである。

(11) Každogo o čěm-nibud' / čěm-libo sprosili.

everybody.ACC about what-nibud' what-libo asked.PL

“They asked everybody about something.” (Pereltsvaig 2008: (2b))

(12) #They asked everybody about *anything*.

2.3. 条件文 (conditionals)

反事実条件文 (counterfactual conditional) (cf. (13)) であるか、普通の条件文 (non-counterfactual conditional) (cf. (14)) であるかに関係なく、*nibud'*-words と *libo*-words が生じることができる。なお、先行研究ではあまり触れられていないが、条件文を前件 (条件節) と後件 (主節) に分けた場合、前件も後件も、ロシア語の場合はどちらの節においても、認可される。

(13) Esli by on tam kogo-libo / kogo-nibud' vstretil, on skazal by

if SUBJ.P he there whom-nibud' whom-libo met he told SUBJ.P

komu-nibud' / komu-libo iz nas.

to_whom-nibud' to_whom-libo from us

あそこで誰かと会っていれば、彼は私達の誰かに言ったでしょう。

(14) Esli ja poedu kuda-nibud' / kuda-libo za granitsu, ja privezu tebe

if I go to_where-nibud' to_where-libo behind broad I will_bring to_you

čto-nibud' / čto-libo v podarok.

what-nibud' what-libo in present

私はどこか外国に行けば、あなたに何かをプレゼントとして持ってくるよ。

2.4. 疑問文 (question)

Yes-No 疑問文では *nibud'*-words, *libo*-words は認可される (cf.: (15))。

(15) Ty ezdil *kuda-nibud'* / *kuda-libo* letom?

you went where-*nibud'* where-*libo* in_summer

あなたは夏にどこかへ行きましたか？

以下ではそれ以外の疑問文や、明示的な疑問の標識 *li* を含む疑問文について考察する。結論から言うと、*li* が次の例のように動詞と結合している場合に限って *nibud'*-words, *libo*-words が認可される。

(16) Zvonil li Sasha *komu-nibud'* / *komu-libo*?

called Q Sasha to_whom-*nibud'* to_whom-*libo*

サーシャは誰かに電話をしましたか？

なお、*li* は動詞と結合するだけでなく、名詞や他の品詞とも結合できる (cf. (17))。しかし、(17b) に示されているように、*li* が動詞以外の品詞と結合していれば、*nibud'*-words, *libo*-words は認可されないのである。なお、*li* が動詞と結合していても、フォーカスを極性を表す動詞以外の要素に当てることができるが、その際も *nibud'*-words, *libo*-words は認可されないのである。例えば、以上の (16) も、フォーカスが *Sasha* にありそのようなイントネーションで発話された場合、(17b) と同じ文法性の判断になる。

(17) a. Tol'ko ona znaet, Sasha li zvonil Natashe.

only she knows Sasha Q called to_Natasha

彼女だけはナターシャに電話をしたのがサーシャかどうかを知っている。

b.*Tol'ko ona znaet, Sasha li zvonil *komu-nibud'* / *komu-libo*.

only she knows Sasha Q called to_whom-*nibud'* to_whom-*libo*

彼女だけは誰かに電話をしたのがサーシャかどうかを知っている。

要するに、疑問文においても述語以外の要素が疑問のフォーカスになっている場合、述語が表している事態の実現が前提になっていて、事態自体は *specific definite* であるので、*nibud'*-words, *libo*-words は基本的に認可されないのである。

一方、Wh 疑問文は *nonspecific* の環境にあたらないので、以下の *nibud'*-words, *libo*-words が可能であるレトリックな読みを除けば、典型的な Wh-疑問文において *nibud'*-words, *libo*-words は認可されないとされている。要するに、(18) は「彼は誰にも何も買っていないでしょう」という意味で発せられる修辭疑問文の場合においてのみ *nibud'*-words, *libo*-words は文法的で、「彼が何かを買ったのは誰にですか」という意味では非文法的である。

(18) #Komu on *chto-nibud'* / *chto-libo* kupil?

to_whom he what-*nibud'* what-*libo* bought

彼は誰に何かを買ってくれたの？

ただし、ここで分配コンテクストを作る Wh- 要素 (*skol'ko* 'how many', *v kakie dni nedeli* 'what days of the week' など) は *nibud'*-words, *libo*-words を認可できる点を指摘しておきたい (cf. (19))。

(19) Skol'ko chelovek ob ètom *chto-nibud'* / *chto-libo* znajet?

how_many people about it what-*nibud'* what-*libo* knows

それについて何かを知っているのは何人ですか？

なお、以下の例で示されているように、Wh- 要素が複数の値をとる可能性がありそれと連動して不定表現の値も変わりうる連動的解釈が行える場合、*nibud'*-words, *libo*-words が文法的である場合がある。

(20) Kto iz vas znaet ob ètom *chto-nibud' / chto-libo*?

who from you knows about it what-*nibud'* what-*libo*

あなたたちの中でそれについて何かを知っている人は誰ですか？

(21) Kogda ty v poslednij raz byl *gde-nibud' / gde-libo* za granitsej?

when you in last time were where-*nibud'* where-*libo* behind abroad

あなたはいつ最後に海外のどこかへ行ったの？

また、こうした例では話者が *nibud'*-words, *libo*-words によって表わされている対象を特定できないといった文脈が背景にあると考えられ、述語によって表わされている事態が nonspecific である点で、Yes-No 疑問文と類似点があると言える。さらに、こうした解釈は、Wh- 要素が人数 (cf. (22)), 主語 (cf. (20)) もしくは時間 (cf. (21)) を表す場合に得られやすいが、適切なコンテクストがあれば、それ以外の Wh- 要素の疑問文においても認可され得る。

(22) S kem iz ètih ljudej u vas byli kakie-*nibud' / kakie-libo* kontakty

with whom from these people at you were which-*nibud'* which-*libo* contacts

v proshlom godu?

in last year

これらの人の中であなたは去年誰と何らかのコンタクトを取ったことがあるの？

2.5. 比較基準 (standard of comparison)

このコンテクストでは *nibud'*-words は不自然である。

(23) *Zdes' prijatnee zhit' chem *gde-nibud' / gde-libo v mire.*

here more_pleasant to_live that where-*nibud'* where-*libo* in world

'Here is more pleasant to live than anywhere in the world.'

Haspelmath (1997: 274 (A125))

2.6. その他

NPI として扱われている不定表現の多くは明示的な否定を含む環境のみならず、いわゆる DE 環境と名付けられている環境において生じるとされる。そして、DE 環境としては次節で考察を行う直接否定環境をはじめ、上ですでに考察した分配的コンテキスト、条件節、疑問文、比較基準に加え、以下のようなものもあげられている。これらのコンテキストでの *nibud'*-words, *libo*-words の生起可能性は以下で示した通りで、一定しない。(また、SCOPE OF ONLY に関する判断について言うと、当該文脈での使用が、DE-ness だけでなく nonspecificity という要請のある *libo*-words と *nibud'*-words の使用条件とあわないためであると考えられる。)

(24) SCOPE OF ONLY

*Tol'ko Adam čital ??kako⁹-libo / *~¹⁰? kako¹⁰-nibud' žurnal.*

only Adam readPST which-*libo* which-*nibud'* journal

"Only Adam has read any journals." cf. Pereltsvaig (2000:(3d))

(25) SCOPE OF FEW

a. *Nemnogie studenty čitali kako⁹-libo / kako⁹-nibud' žurnal.*

few students readPST which-*libo* which-*nibud'* journal

"Few students read any journals." cf. Pereltsvaig (2000:(3e))

9 このコンテキストでは *libo*-words の使用は不自然であるというのが、本稿の著者および文法性判断に関する協力者から得られた判断であり、Pereltsvaig (2000) の結果とは異なる結果となっている。

10 なお文法性の判断について、*~? のように波線 (～) の前後に複数の判断を示しているのは複数の母語話者に例文の文法を確認した際、判断にゆれがあったことを示している。

b. Malo kto *chto-libo* / *chto-nibud'* ponjal.

few who what-*libo* what-*nibud'* understood

何かが分かった人は少数派です。

(26) *TOO-CONSTRUCTIONS*

Adam *sliškom* ustal, čtoby čitat' *kakoj-libo* / ??~Ok *kakoj-nibud'* žurnal.

Adam too got-tired in-order-to to-read which-*libo* which-*nibud'* journal

“Adam is too tired to read any journal.” cf. Pereltsvaig (2000: (3i))

第3章 否定的環境での分布

否定的環境について議論が行われている場合は直接否定 (direct negation) と間接否定 (indirect negation) という概念が問題になる場合が多い。

命題が直接的に否定されるような直接否定に対して、間接的否定には一般的に上位節否定 (superordinate negation) と「意味的な否定 (implicit negation)」が含まれる。以下では、直接否定 (3.1節)、上位節否定 (3.2節)、意味的否定 (3.3節) の順に考察していく。

3.1. 直接否定

従来 of 先行研究では、直接否定の環境に関しては基本的に *ni-words* が用いられ、*libo-words* と *nibud'-words* が認可されないということが一般的に認められている。

唯一、通常同節否定環境では用いられないとされる *nibud'-words* が同節否定辞と共に起る場合について、先行研究で言及されることのあった場合としては、有形の否定辞が生起しているが意味的には否定が無いに等しい、いわゆる *pleonastic/expletive* (冗語的/虚) な否定文での使用可能性 (Brown and Franks1995, Brown1999等) がある。

例えば、Brown and Franks (1995), Brown (1999) は、次の<i>i)</i>~<i>iii)</i>のような例を、同節否定辞 *ne* と共に起しても意味的には否定が無いに等しく、

また通常の同節否定環境とは逆に、*ni*-words が認可されず、*nibud'*-words を用いることが可能になる expletive negation 環境の例として挙げている。

〈i〉*chut'ne* ... や *poka ... ne* のような節

(27) ...*poka ne poluču vašego / kakogo-nibud' / *nikakogo* otveta...

until NEG receive [your / which-*nibud'* / **ni_which* answer]_{GEN}

“...until I receive your/some/*no answer...” (Brown1999:96 (7))

〈ii〉恐れや不安をあらわす *kak by, chtoby* 節

(28) Ja bojus', *kak by kto-nibud' / *nikto* ne narušil éksperimenta.

I fear how SUBJ.P. who-*nibud'* **ni_who* NEG ruined experiment_{GEN}

“I'm afraid someone might ruin the experiment”

(Brown1999:96 (8))

〈iii〉ある種¹¹の *li* Yes-No 疑問文, *ne* V が文頭に移動した Yes-No 疑問文

(29) Ne vyzyvaet li pobeda kadetov *kakix-nibud' / *nikakix* besporjadkov?

NEG cause Q victory of-cadets [which-*nibud'* / **ni_which* disturbances]_{GEN}

“Could it be that the cadet victory is causing disturbances?”

(Brown1999:108 (39))

しかし、以上の expletive な否定文を除いたら、従来の先行研究では、直接否定環境においては *ni*-words が使われ、*libo*-words と *nibud'*-words は使えない、つまり相補分布をなしているということはほぼ当然の前提とされている。

11 Restan (1969) を参考に、ロシア語 Yes-No 疑問文を 1. informative, 2. rhetorical, 3. dubious, 4. presumptive, 5. emotional に分けた場合、*li* Yes-No 疑問文にすることが可能なのは 1. ~ 3. であり、それらは、否定された場合に否定の含意が生まれる 4. や 5. とは違い、expletive negation としての使用が可能であると、Brown (1999) は述べている。

この点は、Haspelmath (1997) の意味論的マップでも反映され、Brown and Franks (1995) および Brown (1999) においても、*nibud'*-words が通常、否定辞 *ne* が現れない種々の環境で現れ、同節否定環境では現れないとされている¹²。

また、Pereltsvaig (2000, 2004) では、*libo*-words が、*ni*-words が認可される同節否定環境で認可されず（以下の (30) を参照）、また逆に *ni*-words は *libo*-words が認可されるような環境において認可されないとしている¹³。

(30) *On *kogo-libo* ne vstretil. (=Pereltsvaig 2000: (11))

he whom-*libo* not met

“He didn’t meet anyone.”

(30)’ On *nikogo* ne vstretil.

he *ni*-whom not met

“He didn’t meet anyone.”

そして、Pereltsvaig (2004) では (31) のように述べた後、そうした両者の相補分布を ‘*bagel problem*’ と呼び、この問題を、分散形態論 (distributed morphology) の枠組みを用い形態論的阻止 (blocking) が起こったものとして分析している¹⁴。

(31) *ni*- and *libo*- items appear in complementary distribution,... This problem is illustrated graphically in (26) below. *Ni*-items are

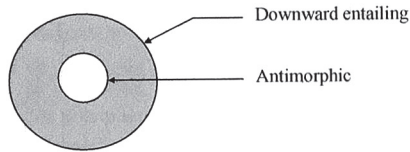
12 なお、Brown and Franks (1995) および Brown (1999) においては、*libo*-words の分析は行われていない。しかし、もし *libo*-words を非同節否定の DE 環境で用いられる weak NPI 要素としてとらえるなら、*nibud'*-words の扱いと同様のものとなるであろうと考えられる。

13 この点は *nibud'*-words も同じとされている。

14 Pereltsvaig (2004) は、語彙選択に際し、二つの要素が類似した条件を持っている場合、条件がより厳密に指定されている要素の方が採用されるとしている。*libo*-words と *ni*-words は DE 環境という意味論的条件指定は基本的に同じである一方、*ni*-words についてのみ同節否定環境という統語論的な条件指定があるとしている。これによって、*libo*-words は *ni*-words より広い使用可能環境を持っていることになるので、*ni*-words が採用される環境では *libo*-words は使われない。

licensed in antimorphic contexts, which are represented by the inner circle on the diagram, whereas *libo*-items occur only in the shaded bagel-shaped area covering downward entailing but not antimorphic contexts. Hence, the “Bagel Problem”.

(32) (=Pereltsvaig 2004: (26))



同様に, Yanovich (2005), Pereltsvaig (2008) のいずれにおいても当該の要素の否定スコープ内解釈については, 言及はない。

従来の先行研究の中では, *libo*-words の同節否定環境での出現可能性に触れられているのは, Tatevosov (2002) においてである。Tatevosov (2002) では, *libo*-words は同節否定環境にある場合に関し, 英語の関連例も挙げながら, 主語と目的語の位置の非対称性について言及がある。(Tatevosov (2002:139-140))

(33) a. **Nobody** came. (***Anybody** didn't come.)

b. I saw **nothing**. / I didn't see **anything**.

(34) a. *Nikto* / **kto-libo* ne prihodil.

ni-who who-*libo* Neg came

誰も来なかった。

b. Ja ne vizhu *nikakih* / *kakih-libo* prichin ne hodit' tuda.

I Neg see *ni*-which which-*libo* reasons Neg to_go there

あそこに行かない理由は見当たらない。

ただし、主語と目的語を区別すべき例を掲げながらも、Tatevosov (2002) は、Haspelmath (1997) の意味論的マップを修正しまとめる際には、その意味論的マップ（前掲の図2）中では、*libo*-words の用法は、同節否定環境までは広がらない形で図が描かれている。

また以上の Tatevosov (2002) の指摘とは別に、*nibud'*-words の同節否定のスコープ内の解釈の可能性に関しては Brown (1999) でも言及されている。

Brown (1999) は *expletive negation* 構文で *nibud'*-words が使用可能である点を分析した後、その脚注の中で次の例をあげている。そして、その例に関しては、否定が *kogda* ‘when’ により抽象的に表現された普遍量化詞のスコープ内にある場合は、*nibud'*-words の狭スコープ解釈が可能になるとしている。

- (35) ..on xodit k bufetčice, kogda ona ne zanjata s kem-nibud' drugim.
he goes to waitress when she NEG busy with who-any another
“.. he goes to the waitress's place, when (ever) she's not busy with
someone else.” (Brown 1999:96 fn. 3 (i))

上のような例は、Brown and Franks (1995) では掲げられておらず、Brown (1999) ではそのような例の存在がこの1例をあげるだけでごく簡単に脚注でふれられていて、¹⁵ ‘attenuated’ な否定文の例とされている。

しかし、この例は *ni*-words が認可されない Brown (1999) が他で挙げている典型的な *expletive negation* の例とは違って、この例では意味的にやはり否定が虚ではなく存在していて、*ni*-words の使用も可能である（次の例を参照）。

15 ‘attenuated’ の具体的な意味について Brown (1999) では説明はないが、本来の力が弱まった、*expletive* に近い否定のことを指しているようである。

(35) '...on xodit k bufetchitčice, kogda ona ne zanjata *ni s kem* drugim
 he goes to waitress when she NEG busy *ni* with whom another

彼は、そのウエイトレスが別の誰に関しても忙しくない時には（い
 つも）彼女のところへ行く。（Brown 1999:96 fn. 3 (i) の例のアレ
 ンジ）

まとめておくと、多くの先行研究においては直接否定環境では *ni*-words
 が使われ、*libo*-words と *nibud'*-words と相補分布をなしているとい
 うことが前提になっていると言える。

しかし、実際には直接否定の環境で使われている *libo*-words と *nibud'*
 -words が少なからず存在している（以下の例を参照）¹⁶。

(36) Tol'ko Natasha ne kupila *čto-libo* / *čto-nibud'* v tom magazine.
 only Natasha Negbought what-*libo* what-*nibud'* in that shop

ナターシャだけがあの店で何かを買わなかった。

(37) Ploho, čto *kto-libo* / *kto-nibud'* iz nih ne prishjel.
 bad that who-*libo* who-*nibud'* from them NEG came

（彼らの中で）誰も（lit. 誰か）来なかったのはよくない（残念だ）。

(38) Ja ne vizhu *kakih-libo* / *??kakah-nibud'* znachitel'nyh izmenenij.
 I Neg see which-*libo* which-*nibud'* substantial changes

私には何らかの大した変化が見えない。

(39) Ja ne nuzhdajus' v *ch'jem-libo* / *???ch'jem-nibud'* sochustvii.
 I Neg need in who's-*libo* who's-*nibud'* sympathy

私は誰の同情も必要としていない。

16 本稿で使われている例の多くはインターネットやコーパスから収集し多少アレンジした実例
 が中心で、文法性判断については著者による判断だけでなく他のロシア語母語話者に確認をとっ
 ている。文法性の判断が分かれる場合についてはその旨注意書きを付してある。

(40) Ja eshche ne sovetovalsja s *kem-libo* / ??*kem-nibud'* po étomu povodu.

I still Neg consulted with whom-*libo* whom-*nibud'* on this matter

私はそのことについてまだ誰とも相談していない。

さらに、上述の通り、(Tatevosov (2002:139-140)) が目的語の *libo*-words が許される一方、主語の *libo*-words は許されないという記述を行っている。(上掲 (34) を参照)。しかしながら、事は Tatevosov (2002) が記述しているほど単純ではなく、(41) が文法的であることからわかるように、主語要素であっても認可される場合もある。

(41) *Kto-libo* iz nashih sotrudnikov tuda ne ezdil.

who-*libo* from our officials there Neg went

私たちの社員は誰もあそこに行っていない。

(42) *Kakih-libo* dokazatel'stv u nas ne bylo.

which-*libo* pieces_of_evidences at us Neg had

私たちには何らかの証拠はありませんでした。

これまでに掲げた例からもわかるように、*nibud'*-words が常に文法的であるわけではない。また先行研究が挙げている *libo*-words の例のように (cf. (30), (34)), *libo*-words が直接否定と共起できない場合がある。本稿ではこの点に関しては、*libo*-words も *nibud'*-words も直接否定と共起し、否定スコープ内に解釈されるには、一定の制約に従っていなければならないからだと考える。

まず、*nibud'*-words について言うと、否定スコープ内に解釈され得る環境は大きく、*nibud'*-words が本来認可される環境（この場合は否定が加わっても基本的に認可されるのである）と、本来認可されない環境に分けることができる。

そして、本来認可されない環境において、否定が加わった時に認可され否定スコープ内に解釈されるためには、何らかの「含意」の存在が必要である。そうした「含意」としては、何らかの話者の *positive expectations* の存在があげられる。ここでいう *positive expectations* とは、否定が作用する前の肯定命題の実現が可能である（であった）という話者の認識を指している。

そうした含意が最も強く感じられる代表的な例としては、話者の何らかの評価を表す、Baker (1970) のいう「特別な述語 (*special predicates*)」¹⁷ (cf. (37)) やフォーカス詞の *dazhe* 'even' や *tol'ko* 'only' (cf. (36)) (同様の働きが *edinstvennyi* 'sole', *odin* 'one' といった形容詞によっても得られる)、話者の態度を表す含みがある *tak i (ne)* (after all) を含む節などが挙げられる。

一方、そうした含意が感じ取りにくいような、単節を始めとする「伝達系節」と「判断系動詞の従属節」のような節の場合は、*nibud'*-words の否定スコープ内解釈が困難である (cf. (38) ~ (40))。 (詳しくは Evseeva (2011) を参照)。

次に *libo*-words について言うと、*libo*-words が有している非特定性という内在的意味は、本来、主題や焦点になるには適さない性質のものであり、*libo*-words は本来フォーカスにも、主題にもなりにくいのである。このことから、否定辞を含む文において、*libo*-words が (焦点もしくは主題の位置として解釈される) 否定辞より前に来ることに對して制限がかかることになる (これによって、Pereltsvaig (2000) の (30) や Tatevosov (2002) の (34) で挙げた例の非文法性が説明される)¹⁸。一方、*libo*-words が限定された領域内の対象を表す場合は主題としての解釈が可能になり、否定辞より前に来られ、主語にもなり得るのである (cf.: (41), (42))。

17 Baker (1970 : 182ff.) の「特別な述語」(*special predicates*) とは、その成立が<期待>されたり<恐れ>られたり<希望>されたりしていた事態が成立しなかったことに関する、<驚き>や<安堵>や<失望>を表現するような述語である。

18 ただし、*libo*-words は *nibud'*-words と同様、特定の「含意」の生じやすい構文の中で使用された場合は、否定辞に対する位置に関係なく認可され、否定スコープ内に解釈されるのである (cf. (36), (37))。

3.2. 上位節否定 (superordinate negation)

上位節否定に関して言うと、補文が不定節であるにせよ定節であるにせよ、対応している肯定文において *libo*-words, *nibud'*-words が認可される場合は、(後ほど取り上げるモダリティ構文での *nibud'*-words の使用を除けば)、基本的に認可される¹⁹(以下の例を参照)。

(43) a. On ne prosil, chtoby my priglasili *kogo-libo* / *kogo-nibud'*.

he Neg asked that we invite whom-*libo* whom-*nibud'*

彼は私たちに誰かを招待するように頼んでいない。

b. On prosil, chtoby my priglasili *kogo-libo* / *kogo-nibud'*.

he asked that we invite whom-*libo* whom-*nibud'*

彼は私たちに誰かを招待するように頼んだ。

19 ただし、主文動詞によっては不定表現の使い分けが文脈による場合もある。例えば、補文動詞が完了体動詞だと (ia)、話し手は「間接的に禁止」「命令できる状況」であり、サーシャという人に対して第三者にあることを言うことを間接的に禁止しているという文脈になり、そうした文脈では *libo*-words が優先され、*nibud'*-words は多少不自然に感じられる。一方、補文動詞が完了体である (ib) の方では、話者がサーシャに対して「命令はできない」一方で、補文によって表されている事態が話者にとっては好ましくないものであって、そうした事態が生じてほしくないという文脈になる。そうした文脈では、*libo*-words, *nibud'*-words とともに使えるが、*nibud'*-words の方が実際の会話において使われる頻度が高い。

(i) a. Ja ne hochu, chtoby Sasha *komu-libo* / *?komu-nibud'* govovil ob ètom.

I Neg want that.SUBJ.P. Sasha to_who-*libo* to_who-*nibud'* tell about this

私はサーシャがこのことを誰にも言わないでほしい。

b. Ja ne hochu, chtoby Sasha *komu-libo* / *komu-nibud'* skazal ob ètom.

I Neg want that.SUBJ.P. Sasha to_who-*libo* to_who-*nibud'* tell about this

私はサーシャがこのことを誰かに言ってほしくない。

なお、次の (iia) のように補文自動詞が状態動詞の場合は完了体でも上記の文脈は二通りありえ、*nibud'*-words も自然である。(一方、補文に完了体動詞が使われている (iib) は後者の文脈のみである。)

(ii) a. Ja ne hochu, chtoby ob ètom *kto-libo* / *kto-nibud'* znal.

I Neg want that.SUBJ.P. about this who-*libo* who-*nibud'* learned

私はこのことを誰も知ってほしくない。

b. Ja ne hochu, chtoby ob ètom *kto-nibud'* / *kto-libo* uznal.

I Neg want that.SUBJ.P. about this who-*nibud'* who-*libo* learned

私はこのことを誰にも知られたくない。

(44) a. Ja ne dumaju, chto Sasha *chto-libo* / *chto-nibud'* ob etom znaet.

I Neg think that Sasha *what-libo* *what-nibud'* about this knows
サーシャがこれについて何かを知っていると私は思わない。

b. Ja dumaju, chto Sasha *chto-libo* / *chto-nibud'* ob etom znaet.

I think that Sasha *what-libo* *what-nibud'* about this knows
サーシャがこれについて何かを知っていると私は思う。

一方、肯定的コンテキストで *nibud'*-words, *libo*-words が認可されない補文に関して言うと、他の環境と同様、補文述語によって表されている事態の実現が前提になってはいけないという条件がある。

このことから、例えば、*znat'* 'know' などの叙実動詞構文のように、不定表現が表す指示物の存在が前提になっているような構文では認可されない。

(45) Ja ne znal, chto Sasha uzhe *s *kem-libo* / *s *kem-nibud'*

I Neg knew that Sasha already with whom-*libo* with whom-*nibud'*

razgovarival po etomu povodu.

spoke on this matter

私はサーシャがその件についてすでに誰かと相談していたと知らなかった。

一方、*govorit'* 'tell', *skazat'* 'say' といった「発話動詞」の場合は *nibud'*-words, *libo*-words の認可が話者の認識によって左右される。具体的には、不定表現が表す指示物の存在が話者にとって不特定であると捉えられている場合、*libo*-words が、そして文脈によっては *nibud'*-words も使える。²⁰ 例え

20 *nibud'*-words の使用に関しては話者間に大きな文法性判断の揺れが見られる。しかし、「彼が誰かを見る」ことが期待され、その期待が外れたといった文脈なら、*nibud'*-words が容認可能である点で殆どの話者は意見が一致している。この点では、期待が込められていると感じられる (47) の方が *nibud'*-words の使用が自然である。

ば、以下の例は「彼が誰かを見たこと」「彼が見た相手」の存在が前提になっていない場合、つまり、彼の発言とは別の根拠から話者が「彼が誰かを見た」という情報を認識しているのではない場合、当該要素は文法的である。

(46) a. On ne govorił, chto videl tam *kogo-libo* / ??~Ok *kogo-nibud'*.

he Neg tell that saw there whom-*libo* whom-*nibud'*

彼は誰かを見たと言っていない。

b. On govorił, chto videl **kogo-libo* / **kogo-nibud'*.

he tell that saw whom-*libo* whom-*nibud'*

彼は誰かを見たと言った。

(47) a. On ne govorił, chto predprinimaet *chto-nibud'* / *chto-libo* po étomu

he Neg says that do what-*nibud'* what-*libo* on this

povodu.

matter

彼はそのことについて何らかの対策を取っているとっていない。

b. On govorił, chto predprinimaet **chto-nibud'* / **chto-libo* po étomu

he says that do what-*nibud'* what-*libo* on this

povodu.

matter

彼はそのことについて何らかの対策を取っているとっている。

モダリティを表す述語構文は特別のグループを形成している。上述の通りそうした構文で否定が加わっていない場合は補文中で基本的に *libo*-words, *nibud'*-words とともに認可される（それぞれの例文の (b) を参照）。否定が加わった場合は、主文動詞によって違いが見られるものの、基本的には使用可能であることが多い。ただし、necessity (deontic (48), epistemic (49))

の場合は, *ni*-words, *libo*-words が優先され, *nibud'*-words が不自然に感じられると判断する話者がいる。²¹

NECESSITY (DEONTIC)

(48) a. Ty ne dolzhen *komu-libo* / *~Ok *komu-nibud'* govorit' ob étom.

you Neg must to_whom-*libo* to_whom-*nibud'* tell about this

あなたはこのことを誰にも言ってはいけない。

b. Ty dolzhen *komu-libo* / *komu-nibud'* skazat' ob étom.

you must to_whom-*libo* to_whom-*nibud'* tell about this

あなたはこのことを誰かに言うべきです。

NECESSITY (EPISTEMIC)

(49) a. On ne dolzhen byl skazat' ob étom *komu-libo* / ??-Ok *komu-nibud'*.

he Neg must was tell about this to_whom-*libo* to_whom-*nibud'*

Lichno ja emu verju.

personally I to_him trust

彼はそのことを誰にも言ったはずがない。私は彼を信じる。

21 なお, 同じ necessity (deontic) であっても *nibud'*-words が非文法的である *nuzhno*, *nado* ('need' 「必要である」 「べきだ」) というモダリティを表す副詞述語もある。また, この場合は *ni*-words が使用されるが, *libo*-words, *nibud'*-words も使用可能であると判断する話者もいる。

(i) a. Tebe ne nado bylo s Ok~**kem-nibud'* / ?~Ok s *kem-libo* / *ni* s *kem* sovetovat' sja.

to_you Neg need was with whom-*nibud'* with whom-*libo* *ni* with whom consult

あなたは誰とも相談してはいけなかった。

b. Tebe nado bylo s *kem-nibud'* / s *kem-libo* / **ni* s *kem* posovetovat' sja.

to_you need was with whom-*nibud'* with whom-*libo* *ni* with whom consult

あなたは誰かと相談すべきでした。

さらに, necessity (deontic) を表している述語には *nel'zja* ('cannot' 「～てはいけない」 「べきではない」) があるが, *nel'zja* は補文に不完了体しかとらない。また *nibud'*-words は不自然である。

(ii) Nel'zja bylo govorit' ob étom *komu-libo* / **komu-nibud'* / *nikomu*.

cannot was to_tell about this to_whom-*libo* to_whom-*nibud'* *ni*_to_whom

このことについて誰にも言ってはいけなかった。

そうした否定が係わった necessity (deontic) モダリティ構文において *nibud'*-words が生起困難である理由としては, *nibud'*-words の不完了体動詞との相性の悪さ, もしくはこれらの構文が本節でこのあと論じるように *libo*-words に比べるともともと *nibud'*-words の使用されにくい「否定的な態度」を表す構文に当たる点があげられる。

b. On dolzhen byl skazat' ob ètom *komu-libo* / *komu-nibud'*.

he must was tell about this to_whom-*libo* to_whom-*nibud'*

彼はそのことを誰かに言ったはずです。

POSSIBILITY (DEONTIC)

(50) a. Ja ne mogu posovetovat'sja s *kem-nibud'* / s *kem-libo*. Ja ne imeju

I Neg can consult with whom-*nibud'* with whom-*libo* I Neg have

prava govorit' ob ètom.

right speak about this

私は誰とも相談をすることができない。これについては喋っては
いけないのだ。

b. V printsipe, ja mogu posovetovat'sja s *kem-nibud'* / s *kem-libo*.

in principle I can consult with whom-*nibud'* with whom-*libo*

考えてみたら、誰かと相談することができる。

POSSIBILITY (EPISTEMIC)

(51) a. Ob ètom ne mog *kto-nibud'* / *kto-libo* / *nikto* uznat'.

about this Neg could who-*nibud'* who-*libo* ni_who learn

そのことを誰も知るはずがない。

b. Ob ètom mog *kto-nibud'* / *kto-libo* uznat'.

about this could who-*nibud'* who-*libo* learn

そのことを誰かが知ってしまったかもしれない。

まとめておくと、*nibud'*-words, *libo*-words とともに、本来認可されるような補文節ならば、主文に否定が加わっても認可されるのである。(例外は necessity (deontic) での *nibud'*-words の使用である。) 一方、本来認可されないものの、主文に否定が加わることによって認可されるようになるの

は、いわゆる「発話系」動詞の場合である。ただし、この場合は、上述の通り、当該の要素の認可が話者の認識によって左右され、やはり、補文述語によって表されている事態の実現が前提になってはいけない。つまり、(*nibud'*-words の場合は文脈の制限が強いものの、) *libo*-words, *nibud'*-words ともに、指示物が不特定である文脈が整っていれば、生起可能であると言える。

3.3. 意味的否定 (implicit negation)

implicit negation の代表例としてよく挙げられるのは、adversative predicates の *doubt*²² である。これらの述語に対応しているロシア語の動詞としては *somnevat'sja 'doubt'* で、*libo*-words, *nibud'*-words ともに認可される。さらに、主文否定であっても、*libo*-words や *nibud'*-word の文法性は変わらない ((54) を参照)。

(52) Ja somnevajus', chto on videl tam *kogo-nibud'* / *kogo-libo*.

I doubt that he saw there who-*nibud'* whom-*libo*

私は彼がそこで誰かを見たと思えない。

(53) a. Ja ne somnevajus' v tom, chto Sasha prochital *kakoj-libo* /

I Neg doubt in the_fact that Sasha read which-*libo*

kakoj-nibud' zhurnal.

which-*nibud'* journal

サーシャは何か雑誌を読んだに違いない。(lit.: 読んだことを私は疑わない)

一方、'implicit negation' としてよく挙げられる complement of absence や *bez* 'without' が取る補部においては一般的に *libo*-words が使用される。*nibud'*-words の使用に関しては判断が分かれていて、不自然であると感じ

22 意味として否定を含意するもの (semantically negative predicates : 'doubt', 'forget' など)

る人と *libo*-words との差がないと感じる人がある。

特に、complement of absence に関しては不自然とする人は少なく、会話での使用に関しては問題がないようである。また、以下のような文では、*nibud'*-words が使われた場合は、「何らかの証拠があってほしい」という含みが強く感じられる傾向がある。

- (54) Otsutsvie *kakih-libo* / ??~Ok *kakih-nibud'* dokazatel'stv zastavilo nas
absence of_which-*libo* of_which-*nibud'* proofsGEN made us
otkazat'sja ot étoj idei.
to_reject from this idea

“The absence of any proof made us reject this idea.”

(Pereltsvaig 2004: (10h))

- (55) On spravitsja bez *kakoj-libo* / *~Ok *kakoj-nibud'* / **nikakoj* pomoshchi.
he will_manage without which-*libo* which-*nibud'* ni-which help

‘He will manage without any help.’

彼は何らかの手助けなしでもできる（と思う）。

(Pereltsvaig 2000: (15a))

なお、こうした predicate of absence と並んで *libo*-words が認可される環境としてよくあげられるのは、*prekratit'* (‘stop’, ‘quit’ [ある動作を] やめる、中止する) のようなある事態・動作の停止を表すような述語 (cf. (56)) や *oprovergnut'*, ‘refute’, ‘disprove’ [反駁する], *otkazat'sja* ‘refuse’ [断る] (cf. (57)) や *otritsat'* ‘deny’, ‘refuse’ [否定する] や *zapretit'* / *zapreshat'sja* ‘forbid’, ‘be forbidden’, ‘prohibit’ [禁止する/される] (cf. (58)) や *izbegat'* ‘avoid’ [避ける] といったタイプの述語 (cf. (59)) である。こうしたタイプの例においては *nibud'*-words を使えるかどうかに関しては話者の判断が分かれる。

(56) Snachala registrirovali kazhdogo gostja v zhurnale, a zatem voobshe
 first registered every guest in journal and then at_all
 prekratili propuskat' *kogo-libo* / *~Ok *kogo-nibud'*, ne imejushchego
 stopped let_in whom-libo whom-nibud' Neg having
 propiski v dome.

registraition in house

始めのうちは来る人全員を日誌に登録していたが、後になってからは、この建物に住民登録のない人はすべて通すことを止めた。

(57) My otkazyvaemsja vstat' na storonu *kogo-libo* / *~Ok *kogo-nibud'*
 we refuse stand on side whose-libo whose-nibud'
 v étom dispute.

in this dispute

この議論では誰かの側に立つことを断る。

(58) Zapreshaetsja ustranjat' *kogo-libo* / *~Ok *kogo-nibud'* iz uchastnikov
 is_forbidden remove whom-libo whom-nibud' from members
 ot uchastija v pribyljah i ubytkah.

from participation in profits and loss

メンバーを利益もしくは損失への関与（に対する責任）から外すことが禁止されている。

(59) On izbegaet govorit' ob étom s *kem-libo* / *~Ok *s kem-nibud'*.

he avoids speak about this with whom-libo whom-nibud'

彼はこの件について誰とも話すことを避けている。

さらに、'adversative predicates' の一つであるとされる 'difficult' に対応している 'trudno' ('difficult' 「困難」「難しい」) といった主文述語の補文についても同じことが言える。

(60) Ego trudno v *chjem-libo* / ??~Ok v *chjem-nibud'* ubedit'.

he hard in what-*libo* what-*nibud'* convince

彼に何かについて納得させることは難しい。

要するに、明示的な否定を含まない何らかの否定的な含みのあるコンテキストや何らかの否定的な態度（禁止や否定的なコメントなど）を含意するような 'affective' なコンテキストに関しては *nibud'*-words の文法性について話者の間で判断が分かれている。

まとめておくと、いくつかのコンテキストに関しては *libo*-words の方が優先されるものの、基本的には *libo*-words, *nibud'*-words とともに、指示物が不特定である文脈が整っていれば、いわゆる affective なコンテキストで生起可能であると言える。

逆に、補文述語によって表されている事態の実現が前提になっているようなコンテキストでは *libo*-words と *nibud'*-words は容認困難である。例えば、DE コンテキストの一つである scope of *ONLY* では、動作の実現自体は前提になっており、*ONLY* の scope で nonspecific な不定表現を使用すると、容認度が低いのである。

同じく、Klima (1964) が 'affective' な要素として挙げている 'adversative predicate' の *surprised* に対応しているロシア語の '*byl udivljen*' が取る補文述語が過去の動作を表している場合も、*ONLY* と同様、動作の実現自体は前提になっていることになり、当該の要素の容認度が極めて低い。

(61) Ja byl udivljen tem, chto on znal ob ètom?~**chto-libo* /??~**chto-nibud'*.

I was surprised by_the_fact that he knew about this what-*libo* what-*nibud'*

私は彼がこのことについて何かを知っていたことに驚いた。

第4章 まとめ

これまで記述してきたロシア語不定表現の分布をここで表にまとめておくと、次の通りである。

表1：ロシア語の不定表現の分布（「~」は話者間の判断の揺れを表している；「/」は例文によって判断が変わることを表している。）

分布（環境）	不定表現	
	<i>libo</i> -words	<i>nibud'</i> -words
irrealis nonspecific contexts (2)-(8)	Ok	Ok
distributive contexts (9)-(11)	Ok	Ok
conditionals (13)-(14)	Ok	Ok
疑問文（question）(15)-(22)	Ok	Ok
standard of comparison (23)	Ok	??
scope of <i>ONLY</i> (24)	??	*~?*
scope of <i>FEW</i> (25)	Ok	Ok
<i>TOO</i> -constructions (26)	?~Ok	??~Ok
direct negation (34), (38), (51), (53), (40)-(46)	Ok	Ok
superordinate negation1（本来認可されるコンテキスト） （negative raisingを含む）(43)-(44), (48)-(51)	Ok	Ok / *~Ok
superordinate negation2 （本来認可されないコンテキスト）(45)	*	*
superordinate negation3‘発語系’(46)-(47)	Ok	??~Ok
implicit negation (52)-(61)	Ok	Ok / *~Ok

以上、本稿ではそれぞれの不定表現について個別に考察をすすめる過程で、各系列の不定代名詞の記述や特徴把握に関し、先行研究に見出される誤りや不適切な部分を指摘し、必要な修正と補足を行ってきた。

参考文献

- Abels, K. 2005. Expletive negation in Russian: a conspiracy theory. *Journal of Slavic Linguistics*. 13 (98), 5-74.
- Baker, C. L. 1970. Double negatives. In *Linguistic Inquiry* : 169-186.
- Brown, S. 1999. *The Syntax of Negation in Russian: A Minimalist Approach*, CSLI.
- Brown, S, and Franks, S. 1995. Asymmetries in the scope of Russian negation. *Journal of Slavic Linguistics* 3:239-287.
- Evseeva, E. 2011. 『ロシア語不定代名詞の分布 —否定が関わった環境を中心に—』
京都大学文学研究科博士論文
- Farkas, D. F. 1997. Dependent indefinites. In Corblin, F., D. Godard, and J. M. Marandin, eds. *Empirical Issues in Formal Syntax and Semantics*. pp. 243-267, Peter Lang Publishers.
- Giannakidou, A. 1998. *Polarity Sensitivity as (Non) veridical Dependencies*. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Haspelmath, M. 1997. *Indefinite Pronouns*. Oxford University Press.
- Klima, E. S. 1964. Negation in English. in Fodor, J. and Katz, J. (eds.) *The Structure of Language*, 246-323, Prentice-Hall, New Jersey.
- Ladusaw, W. 1980. On the notion "affective" in the analysis of negative polarity items. *Journal of Linguistic Research* 1:1-16.
- Moltmann, F. 1997. *Parts and Wholes in Semantics*. Oxford University Press.
- Pereltsvaig, A. 2000. Monotonicity-based vs. veridicality-based approaches to negative polarity: evidence from Russian. In King, T. H. and Sekerina, I. A. (eds.) *Formal Approaches to Slavic Linguistics: The Philadelphia Meeting 1999*, 328-346, Ann Arbor: Michigan Slavic Publications.
- Pereltsvaig, A. 2004. Negative polarity items in Russian and the 'bagel problem'. In Przepiorkowski, A. and Brown, S. (eds.) *Negation in Slavic*, 153-178. Bloomington, Ind.: Slavica Publishers.
- Pereltsvaig, A. 2008. Russian *nibud'*-series as markers of co-variation. In Abner, N. and Bishop, J. (eds.) *Proceedings of the 27-th West Coast Conference*

- of *Formal Linguistics*, 370-378. Somerville, VA: Cascadilla Proceedings Project.
- Progovac, L. 1994 *Negative and Positive Polarity*. Cambridge University Press.
- Restan, P. 1969. *Sintaksis voprositel'nogo predlozhenija*. Oslo: Universitetsforlaget.
- Tatevosov, S. G. 2002. *Semantika Sostavljajushchix Imennoj Gruppy: Kvantornye Slova (The Semantics of the Constituents of the NP: Quantifier Words)*. Moscow: IMLI RAN.
- van der Wouden, T. 1997. *Negative Contexts: Collocation, Polarity and Multiple Negation*. New York: Routledge.
- Zwarts, F. 1995. Nonveridical contexts. *Linguistic Analysis* 25:286-312.
- Yanovich, I. 2005. Choice-functional series of indefinites and Hamblin semantics. Presented at SALT 15, UCLA.